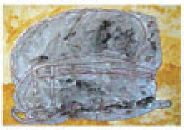
NIE特集
Newspaper In Education
毎月第2・4火曜日発行

七郷小

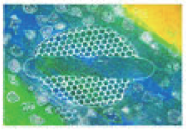
学校名　仙台市立七郷小学校
所在地　仙台市若林区荒井堀添53の２
電　話　022(288)5024
校　長　米倉　清幸
児　童　1029人

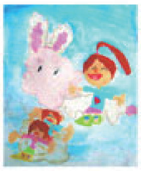
うきうきキャンバス

いつも一緒のランドセル
3年・佐藤尊

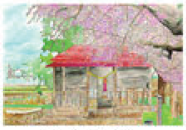


星いっぱいのうちゅう
２年・鈴木大斗

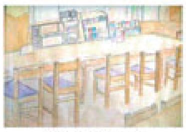




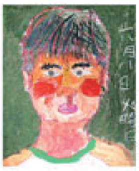
くもにのって
1年・末吉里帆



七郷の鎮守様
６年・浜尾萌映



おもだか図書館
５年・松木萌



ぼくのかお
4年・村山航平

東西線駅の工事現場に潜入！

地下25メートル 未来の象徴

知り隊

私たちが住んでいる七郷地区には、仙台市の地下鉄東西線の駅が二つできます。そのうちの一つ、「六丁の目駅」（仮称）の工事現場を見学させていただくことになりました。「七郷の未来像を発信しよう」という6学年の総合的な学習のテーマの下、私たちは「どんな所に地下鉄の駅ができるのか」を調べるため、地下25㍍に潜入しました。

周囲の壁は縄文の土

現場の職員の人たちに案内される取材陣＝昨年7月7日

地下に潜入したのは昨年7月7日。小雨が降り蒸し暑い日で、雨がっぱを着て学校を出発しました。

工事現場は産業道路の六丁の目西町交差点にありました。案内していただいたのは市交通局東西線建設本部管理課推進係の真野英明さんや、現場の職員の人たちです。真野さんは「暗くて狭いので、足元や頭上に注意して」とおっしゃいました。

地下への工事現場の入り口をくぐると、そこには映画に出てくるような光景が広がっていました。人が歩くには狭くて暗く、下を見ると足がすくむほどの高さでした。現場の職員の人たちの後について、足場を伝って下りました。

地下25㍍に到達しました。周囲の壁は土がむき出しで、触ってみると湿っていて少しひんやりしていました。思ったより硬く、大きな石がたくさん交ざっていました。

私たちが石を触っていると案内人の一人、共同企業体職員の藤川良男さんが「六丁の目西町交差点付近は、1万年前は川の底でした。この石は広瀬川や名取川の上流から長い年月をかけて運ばれてきたので、角がとれて丸く滑っぺらになっています。今野さんが触っている土は縄文時代の土といってもいいですね」と話してくださいました。

自分たちの住んでいる町の地下を見て長い歴史を感じることができましたが、そこに七郷の未来を象徴する地下鉄の駅ができるというのは何とも変な気分でした。

◇◇

地下鉄が完成すれば、仙台の市街地や八木山動物公園はもちろん、泉中央や長町など幅広い地域へのアクセスがよくなり、七郷を訪れる人が増えるでしょう。

総合的な学習では12月に、「七郷の味を求めて」をテーマに通学路や地域にあるお店の調査も行いました。地下鉄利用者がお店や地域を訪れ、多くの方に七郷の魅力をますます知ってもらえたらうれしいと思いました。

文・渡辺匠音、斎藤拓人、斎藤楠花（6年）

言い隊

■イグネの風景守ろう■

七郷には、イグネ（居久根）というすばらしい風景がある。風雪から家を守り、建材や燃料として敷地の周囲に植えられた屋敷林で、その中には先祖から引き継がれた暮らしの知恵がつまっている。

イグネの所有者の方に話を聞く機会があった。「今は木を燃料にすることはなく、手入れに時間と費用がかかる。イグネはもはや必要ない」と話していた。そこで探検したり遊んだり、野菜作りや米作りをしてきた私たちはショックを受けた。この風景が七郷からなくなるのは残念であり残したいという思いがある。イグネをもう一度見つめ直し、地域の一人一人に「守りたい」という意識を高めてもらいたい。

（6年・荒川美咲）

■ごみ拾い運動続ける■

七郷小では「1人で1個、みんなで1000個運動」というごみ拾い運動を行っている。1人が1個ごみを拾うだけで約1000個のごみが集まる。児童の多い七郷小だからできることだ。併せて5、6年生の児童は毎朝、「地域のごみ拾い＆あいさつ運動」を行っている。

歩道や公園にはさまざまなごみが落ちているが、最も多いのはたばこの吸い殻だ。大人が捨てているごみを小学生が拾う。こんな地域でよいのだろうか。私たちの思いが七郷に住む大人たちに伝われば、きっと美しくて住みよい町になるに違いない。これからも新たなアイデアを加えながらこの活動を未来につないでいきたい。

（6年・米沢未来）

教え隊

神楽「種まき舞」

農作業の苦労を表現

七郷神社の秋祭りで種まき舞を奉納＝昨年9月

七郷神社の秋祭りに、七郷小の文化クラブが神楽舞を奉納している。クラブ活動の時間に、地域の方に神楽舞の「種まき舞」を教えていただいている。

種まき舞は、畑を舞台とし、種まきから収穫までの人々の苦労を表現したものだ。お祭りには大勢の人が集まるが、種まき舞がもつ意味を知らない人が多いという。私たちはこの舞を見て、農作業の大変さと食べ物のありがたみを感じてほしいと願っている。昔から農業で生計を立ててきた七郷の住民であるからこそ、大切にしていきたい文化だと考える。

文・菅野百花、武者緑音（6年）

編集後記

これまで、七郷地区と言えばイグネや田んぼばかりがクローズアップされてきました。もちろん、これらは七郷が誇るべき文化です。しかし、地下鉄や高速道路など交通の便がよくなることで都市化が進み、それにともなって人口も増加してきています。

今回の新聞編集を通して、自分たちが住んでいる町だからこそ、よりよく変わっていくように自分たちのアイデアを出したいと思うようになりました。

七郷の伝統文化である神楽、これからの七郷を引っ張っていく地下鉄、今も昔も変わらない七郷のシンボル、イグネや田んぼを、うまく融合させながら明るい七郷をつくりたいです。

〈編集委員〉菅原理花、斎藤楠花、渡辺匠音、斎藤拓人、武者緑音、荒川美咲、半沢未来、岡崎大樹、平沢健介、菅野百花（6年）
題字デザイン　菅原理花（6年）
〈指導教諭〉新妻浩平

次回（3月8日）は、東長町小（仙台市）と入谷小（宮城県南三陸町）です。